

彙 報

モンゴル国における日本隊による考古学発掘調査(2015年)

Reports on the Japan-Mongolia Joint Archaeological Excavations in 2015

笹 田 朋 孝

(愛媛大学)

SASADA Tomotaka

(Ehime University)

(1) ラシャーン・アム 2 遺跡の試掘

【位置】 セレンゲ県フデル郡ラシャーン・アム(49°50'52"N、107°05'52"E)

【期間】 2015年9月11日～9月18日

【体制】 出穂雅実(首都大学東京)、イアン・ブーヴィット(セントラル・ワシントン大学)、中沢祐一(北海道大学)、B.グンチンスレン(モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所)

【経費】 科学研究費補助金基盤研究(B)(代表：出穂雅実)

【概要】 ラシャーン・アム 2 遺跡は、セレンゲ川流域のツフ川支流フデル川中流の西岸段丘上に立地する。遺跡の北側、フデル川に合流する小河谷(ドライ・クリーク)の出口付近に湧泉がある。昨年は、この湧泉の北側において発見したラシャーン・アム遺跡の試掘調査をおこない、上部旧石器時代中期と予想される石刃石器群を検出した。両遺跡は直線距離で約1.3km離れている。

周辺地域の一般調査実施中に、旧石器時代の診断的特徴を有する剥片と剥片石核を多数採集したため、ラシャーン・アム 2 遺跡と命名し、試掘調査を実施した。試掘調査では、耕作土下に風成およびスロープウォッシュの堆積ユニットが認められ、それが遺物産出層準と判断された。石器は円盤型石核と打面調整を有する剥片を特徴とし、中部旧石器時代～上部旧石器時代初期と対比可能である。この他、調査期間の最後に遺跡の南方約4.0kmの北向きの段丘上において、上部旧石器時代初期の診断的特徴を有する大形石刃の遺跡等を発見した。次年度以降も、これらの新しく発見した遺跡の試掘調査と周辺の遺跡分布調査を継続したい(情報提供：出穂雅実)。

(2) シャバルタイン・ボラグ遺跡ほかの踏査

【位置】 ヘンティ県バヤンムンフ郡(46°41'05.7"N、109°17'33.6"E)

【期間】 2015年9月2日～9月4日

【体制】 小畑弘己(熊本大学)、Ch.アムガラントクス(モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所)

【経費】 科学研究費補助金基盤研究(A)(代表：白石典之)

【概要】 農耕資料探求のため、2013年にキビ圧痕のついた土器を採取したシャバルタイン・ボラグ遺跡を再度踏査した。その結果、新石器時代の細石刃関連資料および青銅器時代～匈奴期の土器、契丹の陶器、青銅製髪飾り、青銅製ナイフ?などを採取した。また、近隣の契丹の陶器窯跡を踏査した。(情報提供：小畑弘己)

(3) ヒヤル・ハラーチ遺跡の発掘

【位置】 コビ・アルタイ県トンヒル郡(45°56'46.6"N、93°56'20.2"E)

【期間】 2015年8月13日～8月23日

【体制】 九州大学アジア埋蔵文化財調査研究センター、モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所

【経費】 科学研究費補助金基盤研究(A)(代表：宮本一夫)

【概要】 ヘレクスールなど青銅器時代墓と祭祀遺構からなる遺跡である。この中で、方形墓である1号墓と円形墓の20号墓、祭祀遺構である18号・19号遺構を発掘した。1号墓の方形墓は四隅石を持つものであるがケルン状の積み石を持つものであり、プロト板石墓と考えるものである。埋葬主体はヘレクスールと同じ石槨墓で、モンゴロイド系の人骨を発見した。円形墓はハイル・ハーン文化期のもので、土壌内にコーカソイド系人骨が埋葬されていた。ほぼ同時期と考えられる祭祀遺構の内、18号遺構からは尖頭器と土器片を発見した。典型的な板石墓に至る系譜関係を考える意味で、1号墓は重要な発見であった(情報提供：宮本一夫)。

(4) ホスティン・ボラグ遺跡の発掘

【位置】 トゥブ県ムンゲンモリト郡(48°01'49"N、108°26'53"E)

【期間】 2015年9月1日～9月9日

【体制】 Ch.アマルトゥブシン・G.エレグゼン・L.イシツェレン(モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所)、白杵勲(札幌学院大学)、佐川正敏(東北学院大学)、木山克彦(東海大学)、内田宏美(國學院大学)、笹田朋孝(愛媛大学)

【経費】 科学研究費基盤研究(A)(代表：白杵)、JFE21世紀財団アジア歴史研究助成(代表：笹田)

【概要】 匈奴の遺跡群の発掘調査を実施した。遺跡はヘルレン川支流のズーン・バイトラグ川の北側河岸段丘面に位置している。今年度はこの地域の一般踏査、匈奴の窯業生産地点の発掘調査、製鉄地点の発掘調査、そして青銅器時代の墓(1基)の発掘調査を実施した。南シベリアに類似する製鉄炉が一基調査され、窯業地点では生産活動に関連する土坑などが調査されている。それぞれの遺跡の詳細な年代は現在分析中であるが、いずれも匈奴の時代に収まるものと考えている。次年度以降も継続して調査を行う予定である(情報提供：笹田朋孝)。

(5) アウラガ遺跡(チングス・ヘルレン大オールド跡)の発掘

【位置】 ヘンティ県デリゲルハーン郡アラシャン・オハー(47°05'42"N、109°09'41"E)

【期間】 2015年8月19日～8月27日

【体制】 三宅俊彦(淑徳大学)、笹田朋孝(愛媛大学)、B.ツォグトバートル・G.バットボルト・L.イシツェレン(モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所)

【経費】 科学研究費基盤研究(A)(代表：白石典之)

【概要】 アウラガ遺跡第6地点の発掘調査を行った。第6地点は2007年、2008年にオンドルを持つ建物を発掘し、鉄権や土錘などが出土している。今年度は調査区北側に試掘坑を設定した。その結果、第6地点の建物の北側に隣接して設けられた方形の遺構が2基検出された。大きさは約1.2mで

正方形に近く、深さは約20cm、白色の粘土で表面が整えられていた。用途は不明である。倉庫など何らかの貯蔵施設の可能性がある。

他に良好な状態の鍛冶炉跡を検出した。調査区内で複数の鍛冶の痕跡があり、第6地点の建物北側で鉄鍛冶を継続して行っていたことが明かとなった。大量の鍛造剥片の他、坩堝などが出土している。坩堝には、金と思われる付着物も見られ、鉄以外の金属製品も製造されていた可能性がある。また当遺跡で初めてサクランボ(セイヨウザクラ)の種子を確認した。出土した炭化種子の放射性炭素年代を測定した結果、方形の遺構と鍛冶炉の校正年代は13世紀後半であった。(情報提供：三宅俊彦)

(6) タワン・ハイラースト遺跡第5地点の発掘

【位置】 ヘンティ県デリゲルハーン郡(47°17'11"N、109°02'35"E)

【期間】 2015年9月3日～9月10日

【体制】 B.ツォグトバートル・B.エルデネ(モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所)、三宅俊彦(淑徳大学)、白石典之(新潟大学)

【経費】 科学研究費基盤研究(A)(代表：白石典之)

【概要】 ヘルレン川屈曲部のバヤン・ウラーン山東斜面に位置する墓群の5期目の調査。第5地点と名付けた支群で4基発掘した。いずれの墓も地表に径2～3mの円形積石がみられ、埋葬施設は地下1.5mほどの素掘り土坑であった。盗掘を受けていて副葬品はほとんどなかったが、鉄鏃の入った白樺樹皮製の矢筒が出土した。放射性炭素年代で1基が14世紀、のこり3基は15世紀中頃とわかった。この地域の墓地は15世紀中頃をもって廃絶する。この墓地にはチンギス・カン大オールド(アウラガ遺跡)の関係者が葬られたと考えられる。大オールドの廃絶が15世紀中頃で、その動向と一致する。(情報提供：白石典之)。

*この項は情報提供者からの原稿をもとに、笹田朋孝が編集を行った。

